

2023年2月12日 午前礼拝
「天の御国の生き方Ⅱ」 悲しむ者 説教者:堺希望伝道師

【引用聖句】

マタイ 5:4

4. 悲しむ者は幸いです。その人たちは慰められるから。

【説教要約】

①

前回から、イエス様の「山上の説教」を見ています。

この説教には、とてもレベルの高い行いや、心のあり方が書かれています。もしもこの説教で語られていることを、ただの命令と取ってしまうなら、私達と神様の関係はとても冷たいものになってしまうでしょう。

この説教は、イエス様を信じた人々に、特別に語られたのです。

マタイ 4:15, 「ゼブルンの地とナフタリの地、湖に向かう道、ヨルダンの向こう岸、異邦人のガリラヤ。

マタイ 4:16, 暗やみの中にすわっていた民は偉大な光を見、死の地と死の陰にすわっていた人々に、光が上った。」

マタイ 4:17, この時から、イエスは宣教を開始して、言われた。「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。」

イエス様は、この世界に光として来てくださいました。

真っ暗闇の世界の中で、自分も暗闇の住人として生きる人々に、「光の方へ帰ってきなさい」と呼びかけたのです。

神様から離れている心の状態を、聖書は光のない闇だと言います。イエス様が呼んでくださったのは光の生き方。神様と永遠に一緒にいる世界です。

世界中、どんな人であっても、イエス様を罪からの救い主と信じるなら、その人は永遠に神様と生きるのです。

5～7章まで続くこの「山上の説教」は、「神様とともに生きる生き方」とは具体的にどのような生き方なのか、という説教なのです。

②

前回から繰り返しになりますが、山上の説教の始まりは8種類の「幸いな人」について語られます。

神様から見て「幸せ者」とはどのような人なのか、ということです。その「幸いな人」が神様とともに生きる道を歩んでいるのです。

前回は、「幸いな人」の1番目である「心の貧しい人」についてご一緒に見てきました。それは、自分の人生や自分の心が、どんなに満たそうとしても満たされないものであると自覚している人のことです。実はみじめで虚しい人生を満たされるのは、イエス様ただお一人であるということなのです。

今回は、それに引き続き「悲しむ者」について見ていきます。

マタイ 5:4, 悲しむ者は幸いです。その人たちは慰められるから。

この2つ目の「幸いな人」は1つ目の続きです。

マタイ 5:3, 「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだから。

自分の人生がみじめであり、神様しか満たすことができないと知った人は、次に悲しみを知るのです。

旧約聖書のエレミヤ書という預言書があります。これは若くして預言者になるよう神様から召されたエレミヤが書いたものです。

エレミヤ 1:4, 次のような主のことばが私にあった。

エレミヤ 1:5, 「わたしは、あなたを胎内に形造る前から、あなたを知り、あなたが腹から出る前から、あなたを聖別し、あなたを国々への預言者と定めていた。」

エレミヤ 1:6, そこで、私は言った。「ああ、神、主よ。ご覧のとおり、私はまだ若くて、どう語っていいかわかりません。」

エレミヤ 1:7, すると、主は私に仰せられた。「まだ若い、と言うな。わたしがあなたを遣わすどんな所へでも行き、わたしがあなたに命じるすべての事を語れ。」

エレミヤ 1:8, 彼らの顔を恐れるな。わたしはあなたとともにいて、あなたを救い出すからだ。——主の御告げ——」

エレミヤは若い頃、神様に招かれて悔い改めと神の怒りを語る預言者となります。誰に語るように言われたかという、神の民ユダに対してでした。

始め、エレミヤはなぜユダに悔い改めを宣べ伝えなければならないのか分かりませんでした。

神を信じ、神を礼拝している民に、「悔い改めなければ神がさばきをくださる」という理由が分からなかったのです。

しかし、みことばを宣べ伝えていくうちに分かってくるのです。ユダの民は表面的には神を礼拝しているけれども、同時に偶像礼拝をして、心は神様から全く離れていると。

エレミヤ 5:3, 主よ。あなたの目は、真実に向けられていないのでしょうか。あなたが彼らを打たれたのに、彼らは痛みもしませんでした。彼らを絶ち滅ぼそうとされたのに、彼らは懲らしめを受けようとしませんでした。彼らは顔を岩よりも堅くし、悔い改めようとしませんでした。

エレミヤ 5:4, そこで、私は思いました。「彼らは、実に卑しい愚か者だ。主の道も、神のさばきも知りもしない。

エレミヤ 5:5, だから、身分の高い者たちのところへ行つて、彼らと語ろう。彼らなら、主の道も、神のさばきも知っているから。」ところが、彼らもみな、くびきを砕き、なわめを断ち切っていました。

伝えても伝えても悔い改めません。貧しいものから身分の高い人まで、皆神様から心が離れているという現実にあつかるのです。

その時エレミヤは、民の罪がどれほど大きく、破滅に向かっているのかを実感したのです。それは神様が実感されていることと同じ目線になったということです。

エレミヤ 8:10, それゆえ、わたしは彼らの妻を他人に与え、彼らの畑を侵略者に与える。なぜなら、身分の低い者から高い者まで、みな利得をむさぼり、預言者から祭司に至るまで、みな偽りを行っているからだ。

エレミヤ 8:11, 彼らは、わたしの民の娘の傷を手軽にいやし、平安がないのに、『平安だ、平安だ』と言っている。

エレミヤ 8:12, 彼らは忌みきらうべきことをして、恥を見ただろうか。彼らは少しも恥じず、恥じることも知らない。だから、彼らは、倒れる者の中に倒れ、彼らの刑罰の時、よろめき倒れる」と主は仰せられる。

民は、自分が神に背いていることや、悲惨な破滅が待っていることなど思いもしていませんでした。

自分たちは神に従っていると思っていました。

しかし実際には、罪を認めず破滅に向かっていたのです。

それからエレミヤは語り続けます。語り続けたために殺されそうにもなります。

エレミヤ 18:19, 主よ。私に耳を傾け、私と争う者の声を聞いてください。

エレミヤ 18:20, 善に悪を報いてよいでしょうか。まことに彼らは、私のいのちを取ろうとして穴を掘ったのです。私があなたの御前に立って、彼らに対するあなたの憤りをやめていただき、彼らについて良いことを語ったことを、覚えてください。

彼らの中に住んで、「悔い改めなければ神に滅ぼされる」と語り続けることはどれほど苦しいことだったのでしょうか。

それでも、エレミヤは国を出たり、みことばを語ることをやめなかったのです。

それは、一言で言うならばエレミヤが民を愛していたからです。民の罪はひどく、必ずさばきが下ります。そのことを真剣に受け止めていたのはエレミヤだけだったのです。

語れば語るほど、エレミヤの苦しみも増します。

エレミヤ 20:7, 主よ。あなたが私を惑わしたので、私はあなたに惑わされました。あなたは私をつかみ、私を思いのままにしました。私は一日中、物笑いとなり、みなが私をあざけります。

エレミヤ 20:8, 私は、語るごとに、わめき、「暴虐だ。暴行だ」と叫ばなければなりません。私への主のみことばが、一日中、そしりとなり、笑いぐさとなるのです。

エレミヤ 20:9, 私は、「主のことばを宣べ伝えまい。もう主の名で語るまい」と思いましたが、主のみことばは私の心のうちで、骨の中に閉じ込められて燃えさかる火のようになり、私はうちにしまっておくのに疲れて耐えられません。

エレミヤ 20:10, 私が多くの人のささやきを聞いたからです。「恐れが回りにあるぞ。訴えよ。われわれもあいつを訴えよう。」私の親しい者もみな、私のつまづくのを待ちまわっています。「たぶん、彼は惑わされるから、われわれが彼に勝って、復讐してやろう」と。

エレミヤは、「涙の預言者」と言われます。民を愛しているがゆえに、悔い改めとさばきを宣言し続けました。

そのために彼は、愛する民から憎まれ、殺されそうになり、自分でも語るのが嫌になった時もあります。

彼の人生は悲しみに彩られていました。それは何に対する悲しみかというと、罪に対する悲しみです。

神様から離れている生き方がどれほど虚しく、最後には滅びに至るのかを心から悲しんでいたのです。

結局、国は悔い改めることなく、バビロンという国に滅ぼされてしまいます。

その最後までエレミヤは語り続けたのです。若い頃召されたエレミヤは40年みことばを語り続け、この時60～70歳です。

少し前まで、エレミヤの人生は極端な例だと思っていました。悔い改めを宣べ伝えても誰も悔い改めず、憎まれて親友にさえ殺されそうになり、最後はさばきで国が滅んでしまう。青春も生活も犠牲になって、一体エレミヤにとって幸せなことが一つでもあったのだろうか、と。

しかしエレミヤが向き合った罪の現実、私も同じであると気付かされました。神に望みを置かない、悔い改めのない生き方は虚しいのです。その先は永遠の滅びです。

そのような現実が自分や自分の身の回りにもあるということ、心でよく分かっていないから、真剣に罪を悲しんでいないのです。

③

マタイ 5:4, 悲しむ者は幸いです。その人たちは慰められるから。

罪と向き合うことは、自分や他人が本当は悲惨な人生を送っていることへの悲しみを生みます。喜んでいたことが、実は喜べないことに気がつくからです。この世に望みを置くことと、神に望みを置くことは相容れないからです。

では、望みはないのかというと、そうではありません。

私達が毎礼拝ささげている手話賛美は「望みはただ主の血と義にあるのみ」と始まります。イエス様にだけ望みがあるのです。それは、イエス様がこの罪の世界と自分自身の罪から救い出すために、いのちを捨ててくださったからです。

私達も、かつてはエレミヤが何度語っても悔い改めるところか「自分は平和だ」と思っていた人でした。

しかし、イエス様は罪人を救うために来られ、いのちを捨ててくださったのです。

それは、ユダの人々のように私達も罪のために滅ぼされる存在でしたが、イエス様が代わりに死んでくださったので、私たちは神の怒りから救われたということです。もう二度と、罪のために滅ぼされることはありません。

黙示 21:3, そのとき私は、御座から出る大きな声がこう言うのを聞いた。「見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、

黙示 21:4, 彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。」

究極は、やがてくる新しい天と新しい地で完成します。神様が王となられ、罪がない世界に生きることになります。その時、すべての悲しみが終わります。

エレミヤは、語れば語るほど悲しみが増し加わりましたが、途中から主がともにいることが分かって、取り乱さなくなります。

神が自分とともに生きてくださることに、平安を知ったのです。

今はまだこの地上で生きる限り、私たちは自分の罪や他人の罪に圧倒されるかもしれせん。罪に向き合えば向き合うほど悲しみが増します。

しかし自分の罪も他人の罪もきよめることができるイエス様がおられます。この方に望みを置く時、私たちは罪に対する一番大きな悲しみを味わうとともに、イエス様からの完全な慰めもいただけるのです。